

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2020年度第1回研究会（通算第3回目）

日時：2020年11月15日（日）13:00-18:00

場所：龍谷大学大宮キャンパス および ZOOM

出席者（対面）：鶴田 格、田中利和、松田正彦、池上甲一、末原達郎、坂梨健太

出席者（オンライン）：石川博樹、杉村和彦、安溪貴子、石山俊、小松かおり、藤本武、足達太郎、原子壮太、坂井真紀子、加藤珠比、山根裕子

発表1：田中耕司（京都大学名誉教授）

「東南アジア農業開発史からみたアフリカ農業－両熱帯の比較農法論に向けて－」

「アフリカ研究の60年を振り返る」「32年前に始まった地域間比較というアイデア」「両熱帯の農法・農業発展をどう比較するか、また、どうとらえるか？」「グローバル化と地域間比較研究の新たな可能性」という流れに沿って、東南アジアとアフリカにおける農業開発の展開を研究史からたどりつつ、両地域の比較から浮かび上がる今後の研究課題を展望した。まず、1960年代のアフリカ研究のパイオニア達から今日の若手研究者につながる日本のアフリカ農業研究のあとを辿ることから始め、集約的農業をめぐる両地域の異同を技術史的に鳥瞰した。1988年の最初の地域間比較やその後続くいくつかの比較の試みを振り返りながら、アフリカにおけるバナナやキャッサバを軸にしたアフリカ固有の「根栽農業革命」という捉え方を提唱するとともに、選択的、状況的、機会的と言えるような特徴によってアフリカにおける今後の農業革命を描いていく可能性にも言及した。また、アブラヤシを例に商業的農業の展開をめぐる両地域の違いを対照させつつ、在来農業と商業的農業の両側面からアフリカ農業を分析・理解することの重要性も指摘した。最後に、今後、両地域の研究者が生物資源管理やポリティカル・エコロジー、モラル・エコノミーなどに関わる課題をめぐって共同研究の機会を増やしていくことを期待して発表を終えた。

発表2：徳永光俊（大阪経済大学名誉教授）

「生きもの循環論による新たな日本列島農法史と比較農法論の試み」

1. 生きもの循環論では、人類中心主義から生きものすべての循環へを強調した。「おかげさま・おたがいさま」である。2. 農業・農法論では、狭義の農法（農業技術体系）と広義の農法とを区別し、後者は生存＝生産＝生活である。人類が他種の「いのち」を奪うことにより人類は個と種の再生産が可能となるという、人類のみが持つ痛みの自覚を強調した。

「いただきます・ごちそうさま」である。3. 在地農法論では、各地域の風土によって異なる自然的・経営的・生活的・文化的条件により、農民たちによって歴史的に形成された、立地生態均衡系の農法である在地農法の構造(システム)と展開(ダイナミズム)を紹介した。

4. 日本列島農法史では、西南暖地水田多毛作(大和農法)、東北寒地水田稲単作(庄内農法)、北海道開拓畑作+畜産、関東・東山畑作+養蚕、九州中南部畑作、南西諸島畑作の6タイプがあるとした。大和農法では、自然に順応した「待つ」から自然を征服しようとする「待てない」へ、生きもの循環の歪曲、農法革命が13世紀頃に起こるとした。そして、私が日本農法の原理とした、まわし(循環)・ならし(平準)・合わせ(和合)は、日本列島農法にも通底するのかを考えた。

最後に、5. 比較農法論として、在地農法をどのように比較するのかを考えた。ヨーロッパとの比較に関しては、麦畑作地帯と稲水田作地帯の根本的な違いを無視しており、比較すべきは日本の畑作タイプとだったのでは。いや、東アジア・日本の稲作と畑作は、同一の論理なのか? 新しい枠組みの比較農法論により、アフリカ農耕牧畜との比較も可能になるかもしれないと、問題提起した。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.